

ドイツの「運動導入学校」の理念と実践

Concept and practice of the “moved school” in Germany

岸 本 肇

Hajime KISHIMOTO

概要

本研究は、ドイツの「運動導入学校」(“Bewegte Schule”)の理念と実践に関して、文献と教育実践報告をもとにして分析することを意図した。下記の結果は、この学校の主な特徴を示している。

「運動導入学校」は、子どもの運動不足と体力低下に対する対策として始まり、1990年代に広がった。その学校構造は、授業や教科外活動のような教育活動だけでなく、校舎・教室・校庭などの学校環境も含んでいる。体育の授業では、子どもたちは、運動量を増やしたり、筋肉トレーニングよりも、むしろ運動感覚を発達させたり、多様な運動を経験することが重視されている傾向である。体育以外の教科においても、「運動を伴う学習」が取り入れられている。近年、「運動導入学校」と全日制学校とを一体化した試みがなされている。

キーワード：運動導入学校 体力づくり 運動を伴う学習 全日制学校

Abstract

This research intended to analyze the conception and practice of Germany's “moved school” (“Bewegte Schule”), based on literatures and educational practical reports. The results, described below, went on to reveal this school's primary characteristics.

The “moved school” got its start as a strategy designed to combat a lack of exercise and failings of fitness among children, and it spread out in the 1990's. The school structure is not limited merely to educational activities such as classes and extracurricular activities, but extends all the way to the school building, classrooms, playground, and other aspects of the school's environments. In the physical education class students tend to be taught with an importance on developing their perception of movements and experiencing various physical activities rather than merely increasing their quantity of exercises or doing strength training. Even for subjects rather than physical education, “Learning with/through movement” is introduced. In recent years, there have been attempts to combine

the “moved school” and the whole day school.

Keywords: moved school, fitness education, leaning with/through movement, whole day school

目次

1. はじめに
2. ドイツにおける体力づくりの流れとその背景
 - 2.1. 「体力づくり学級」に代わる「運動導入学校」
 - 2.2. 子どもの「からだと心」の問題
3. 「運動導入学校」の全体構造と実践領域
4. 体育（Sport科）の授業に直接関わらない実践
 - 4.1. 運動を伴う学習（Bewegtes Lernen）
 - 4.2. 運動着座（Bewegtes Sitzen）
 - 4.3. 「運動休憩」「運動休憩時間づくり」と学校の運動環境づくり
5. 全日制学校の設置進行と「運動導入学校」
6. 結論

注

文献

1. はじめに

戦後の日本の教育において、「体力」が本格的に注目されたのは、1966年、体育白書と呼ばれた『青少年の健康と体力』（文部省，1966）が発表されたときが最初である。その頃はオリンピック東京大会（1964年）が開催された直後であり、陸上競技や水泳における日本選手の不振は、たしかに「（青少年の）体格の向上に見合う体力の充実を図るには、どのようにすべきかということが、今後の大きな課題であり努力目標であろう」（同前，p.2）が、人々の共通認識となっていた。オリンピックは国民のスポーツへの関心ばかりでなく、「人づくり」をする教育における「体力づくり」の課題も提起したのである。また当時、人材を確保する必要がある経済界からは、高度経済成長時代の労働に耐える体力が青少年に要求されている状況もあった（経済審議会，1963）。こういう大資本の要求も、教育界への圧力になったことは否めない。

かくして、1968、69、70年、小・中・高等学校の学習指導要領が改訂される。体育の主要目標は、「健康の増進と体力の向上を図る」となった。そのことが発端となり、体育の

授業ばかりでなく、学校の教育活動として体力づくり^{注1)}が流行する一時期が現出したのである。その後、過度の体力づくりは反省され、3回改訂された学習指導要領において、健康・体力の目標に「運動の楽しさ」の目標が加わり、現在に至っている。要するに、「楽しさ」も強調されるようになっただけで、「体力」を重視する体育は、半世紀近く続いているのである。目下、文部科学省は、中央教育審議会答申「子どもの体力向上のための総合的な方策について」（2002年）を受けて、子どもの体力向上推進事業を実施しており、その中で学校における体力向上のとりくみの充実も要請している。

健康・体力のねらいを一義とする体育には、体育の主要目標は「身体形成」ではないという立場からの批判がある。その代表格として、運動文化の学習を体育の本質とする「運動文化による人間形成」論が挙げられる（丹下，1963）。学校体育研究同志会の「楽しい体育」実践を支えている運動文化論は、その考え方に依拠している。それとは別の民間体育研究団体の全国体育学習研究会も、「楽しい体育」を主張している（全国体育授業研究会，2008）。「プレイ教育」として日本に紹介されている、体育はそれ自身の諸活動に本質的な価値があるとするシーデントップの「自己正当」論も、日本語への翻訳出版に際しては、『楽しい体育の創造』を銘打っている（シーデントップ，1981）。それらの理論・実践は、体育の学習指導要領に、「運動の楽しさ」の目標が盛り込まれる影響力を発揮したと考えられる。

体力主要目標に対する批判には、ドイツの影響を受けた考え方もあった。その論拠は、1970年前後に始まる旧東西両ドイツにおける体育科からスポーツ科への教科名改称である。スポーツ先進国の動きに乗り遅れないように、日本でも体育科をスポーツ科に改めるべきであるとの体育学界の重鎮の意見まで出てくる始末であった（前川，1981）。端的に言えば、体育は、「身体の教育」「身体活動をとおしての教育」であり、スポーツの考え方・内容で編成する体育にすれば、その限界が払拭できるという「スポーツ教育」論である。

岸本（1995）は、ドイツで「体育」の教科名が「スポーツ」に変更されたといっても、「身体の側」に偏った伝統的な体育（旧西ドイツでは、“Leibeserziehung”）からの変革であり、スポーツ科になってからのドイツでも「健康教育＝体力づくり」が重視されていることを明らかにした。人々の健康と体力、および豊かなレクリエーションをつくるスポーツを、生涯にわたり楽しむ「スポーツライフ」を目指す21世紀において、健康・体力の目標とスポーツの教育とを切り離す体育は成り立たないと筆者は考える。

そのことを国際的視野から見る研究資料として、この論文では、ドイツの最近約20年間における体力づくりの動向について紹介したい。具体的には、“Bewegte Schule”という学校の教育活動全体に運動を取り入れる「運動導入学校」^{注2)}についてである。

かつて岸本（2006）は、ドイツには“Bewegte Schule”という教育実践があり、その学校では、座学の授業中に気晴らし・疲労回復の軽運動が実施されていることを紹介した

ことがある。しかしその後、ドイツにおける“*Bewegte Schule*”、すなわち「運動導入学校」の存在を日本体育学会のレベルで発信することはなかった。

今般、やり残していたその全体像がわかる論文執筆に取り掛かった時期に、近藤ら(2013)による「ドイツとスイスにおける『動きのある学校』」が発表された。「動きのある学校」とは、“*Bewegte Schule*”を指している。その論文により、“*Bewegte Schule*”が、日本ではじめて本格的に紹介された意義はあると思うが、“*Bewegte Schule*”を「動きのある学校」と捉えること自体が根本的な疑問である。また、執筆者が5人もいる論文であるが、用語(ドイツ語)の意味の取り違えが散見される^{注3)}。本研究は、文献的に検証できる形で、健康・体力に関する教育としてのドイツの「運動導入学校」の理念と実践を正確に伝えようとするものである。

2. ドイツにおける体力づくりの流れとその背景

2.1. 「体力づくり学級」に代わる「運動導入学校」

わが国の学校で、戦後世代の体力不足傾向に対処した体力づくりが始まったのは、前章で述べたように、1960年代後半からである。欧米の学校で、組織的な教育活動としての体力づくりが行われるようになったのは、日本より少し遅れる。

ドイツの学校で体力づくりが盛んになったのは、1980年代後半からである。典型的には、ノルトライン・ヴェストファーレン州(以下、NRW州と略す)の文部省が発行した健康教育(*Gesundheitserziehung*)の指導書が示す内容と方法が挙げられる(*Der Kultusminister des Landes NRW, 1988*)。その頃は、「体力づくり学級」(*die fitte Schulklasse*)を標榜した実践が広がっていた(岸本, 1995)。その実践には、保健・衛生教育のイメージが強い日本の健康教育と異なり、体力づくりの比重が大きい特徴があった。

90年代に入ると、「体力づくり学級」は影を潜める。体力づくりが下火になったのではなく、その代わりに「運動導入学校」が現れたのである。その後、現在に至るまで、ドイツの学校における体力づくりは、「運動導入学校」が主流である。

2.2. 子どもの「からだと心」の問題

「運動導入学校」の前提・必要性として、子どもの健康・体力問題と生活環境の悪化が、様々に論じられている。

子どもの「運動不足」に関しては、単なる「運動」(*Bewegung*)の「不足」「欠乏」を意味する“*Bewegungsmangel*”“*Bewegungsarmut*”といった表現では生ぬるく、「子どもの運動世界の危機」(*Krise der kindlichen Bewegungswelt*)であると(Thiel et al., 2007)、その「危機」的状況を訴える研究者もいるほどである。総体的には、「運動不足と

身体疎外」(Bewegungs- und Körperlosigkeit)の表現が当たるであろう(Laging & Schillack, 1998, p.17)。

交通量の増加に伴い、「路地裏遊び」ができなくなっている。いまから10年以上前、2001年の時点で、ハンブルクの子どもは、36.6%しか毎日外遊びをしていなかった。同じドイツ語圏のスイスの子どもは、75%が、毎日、テレビ、ラジオ、音楽を視聴し、14%しか運動をしていなかったというデータもある(Illi & Zahner, 1999)。2007年には、地域のスポーツクラブへ週1回以上定期的に通うグルントシュレー(日本の小学校の1～4学年が相当)の子どもは、男子57%、女子55%と、6割を切っていた(Schmelt, 2011)。

そのような居住空間における運動機会の減少や力を要しない便利な生活が、健康阻害はもちろん、攻撃性と暴力、不穏や授業不集中など学校の雰囲気悪化の誘因となっている(Laging & Schillack, 1998, p.3)。さらに、アルコール、薬物の問題もある(Thiel et al., 2007)。

「子どもの成人病」が増えており、肥満、高たんぱく摂取、高血圧など(Ketelhut & Bittmann, 2001)、心臓病、肥満・過体重、脂肪過多、メタボリック・シンドロームなど(Horn & Keyßner, 2009)、高脂血症、過体重、高コレステロール、筋力低下、脂肪過多、アレルギー、円背などの姿勢悪化、甲状腺肥大など(Thiel et al., 2011, pp.11-13)が、指摘されている。その他、姿勢悪化、頭痛、胃痛、消化器系の障害、不安感情、多動、集中力不足などもいわれている(Coenen, 2007)。

体力に関しては、特に全身的なスタミナに関係する持久力不足が憂えられている。1970年代に欧米で流行した、全身持久力を測定するクーパーテストが、学校で蘇っている(Frommel, 2010; Hasler & Granacher, 2010)。

運動能力は、20m走、30秒間腕立て伏せ、メディシンボール投げ、立ち幅跳び、6秒間走の測定をもとに、この10年間を総体的に見ると、10%の低下率であったと報告されている(Wydra & Leweck, 2007)。身体の器用さの低下が体育の授業で実感されていることは、コーディネーション・テストを用いる教材研究が多いことからわかる(König, 2007)。

結局、ドイツの子どもの健康・体力の問題も、日本の子どもの「からだと心」の問題も、よく似ている。しかし、ドイツの「運動導入学校」と日本の学校の体力づくりとは、その考え方・範囲・方法において、かなりの違いが見られる。次章で、そのことについて検討したい。

3. 「運動導入学校」の全体構造と実践領域

その淵源を辿れば、「運動導入学校」の最初の発案者は、スイスの Illi とされる (Thiel et al., 2011, p.13) ^{注4)}。図1は、その Illi (1995) のカテゴリーが修正された「運動導入学校」の構造図である (同前, p.45)。これを見ると、「運動導入学校」が、学校の「体育授業」(Sportunterricht)、「教科外の運動機会」(Außerunterrichtliche Bewegungsanlässe) を超えた、学校の運動環境の整備・充実を含む、親・学外組織とも協同する総合的な教育活動であることがわかる。

以下、図中のカテゴリー名からだけでは、それが何を意味しているのか判然としないものについて簡単に説明したい。

「運動を伴う学習の諸形態」(Formen des bewegten Lernens) とは、体育に限らず身体を動かして学習させることであり (同前, pp.60-63)、その具体的実践については、次章の「4.1.」で紹介したい。

「運動休憩」(Bewegungspausen) は、運動をして積極的の休息を取ることで、授業中の疲労回復のための軽運動なども含まれる (同前, pp.64-65)。「運動休憩時間づくり」(Bewegte Pausengestaltung) は、子どもを運動に仕向けるように、時間を長くし、内容を工夫した「休み時間」をつくることである (同前, pp.74-76) ^{注5)}。

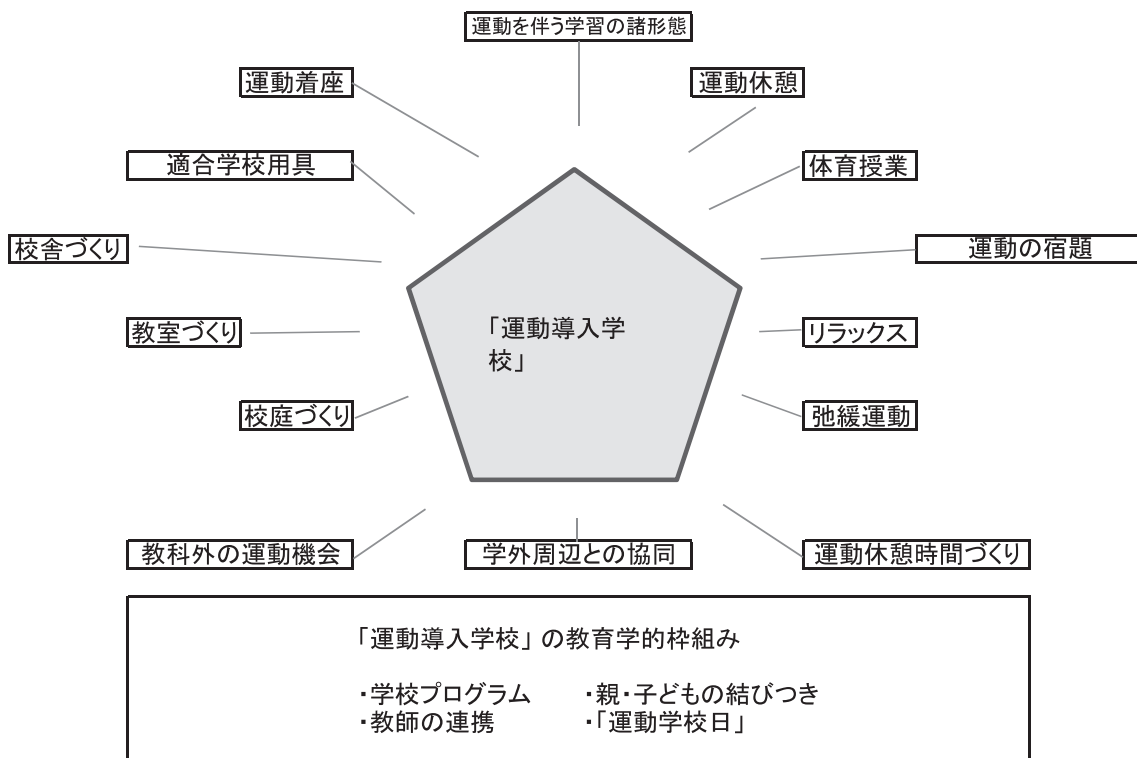


図1 「運動導入学校」の構造指標
(Thiel et al., 2011)

「リラックス」(Entspannung)、「弛緩運動」(Entlastungsbewegungen) や「運動着座」(Bewegtes Sitzen) は、運動の種類である(同前, pp.75-70)。日常的な体力づくりを家庭学習課題とする「運動の宿題」もある。

「校庭づくり」(Schulhofgestaltung)、「教室づくり」(Klassenraumgestaltung)、「校舎づくり」(Schulhausgestaltung) は、運動のための学校環境づくりである。校庭は、もともと運動をする場所であるが、それを改造して、より運動と体力づくりに役立つように改造するのが「校庭づくり」の意味である(同前, pp.58-59)。校舎や教室にある戸棚やロッカー類、校具や机・椅子などの配置を運動しやすいように工夫するのが「校舎づくり」「教室づくり」である(同前, pp.54-56)。「適合学校用具」(Angepasstes Schulmobiliar) は、机・椅子のような「学習家財」はもとより、各種の学校用「家具」やその部品も含まれる(同前, pp.56-57)。大型ブロックやボール、円錐形のコーンなどの体育用具も、そう考えてよい。それらをうまく使用すれば、室内運動にも利用できることから、そのように分類されている。

図1の下部の囲み部分、「『運動導入学校』の教育学的枠組み」にある「運動学校日」(Bewegter Schultag) は、時間割を流動的に扱い、その日の授業や休憩時間を運動中心に組む「特別日」である(同前, p.119)。

さらに表1で、「運動導入学校」の「コンセプト」「基本的内容」を見ると、具体的に「運動導入学校」における実践がわかる(同前, pp.15-16)。実際には、同じ「運動導入学校」であっても、それぞれの学校の方針により、具体的実践は異なっているのである。

表1 「運動導入学校」のコンセプト概観

推進者	コンセプト	基本的内容
Aschebrock (1996)	運動する喜びがある学校	日々の運動教育、自前の学校プログラム
Dannenmann(1997)	運動空間としての学校	授業原理としての運動、運動を取り入れた学校生活、活動的着座と活動的休憩
Ehni (1997)	子どもの運動生活と学校の運動生活	全感覚を用いた学習、授業中の運動、運動休憩時間と教育的合間、教科学習の部分的停止
Funke-Wienecke (1997)	着座空間から運動空間へ	着座空間から運動空間へ、校内の融和機能と気晴らし機能の最適化
Hildebrandt (1997)	運動に親しむ学校	心理運動的な作業方法、移動式の授業を組織、全身的学習、魅力的運動空間
Illi (1993;1995)	運動導入学校	運動を伴う学習、運動着座、可動式学校用具、快適教室づくり、精神的リラックス、 <u>感覚重視型体育授業</u> 、運動休憩時間

Klupsch-Sahlmann (1997)	運動導入学校	「運動導入学校」の家（8 要素： 教室—運動空間、運動休憩、休憩時間における運動機会、授業中の沈黙、教科外の活動、 <u>体育と運動の授業</u> 、全員参加、授業のテーマに関係する運動）
Laging (1998)	運動する学校文化	運動と気晴らしをする敷地としての校庭、スポーツ文化祭、動きまわる空間、運動を伴う（全身的）学習、運動する学校文化としての学校スポーツ
Pühse (1995)	運動導入学校—運動教育の展望	III を参照、 <u>体育授業と「運動導入学校」の領域の明確化</u>
Zimmer (1996)	運動の中へ学校をもたらす	教科を超えて広がる学習原理としての運動、 <u>多様な運動体験を伴う教科としての体育</u> 、 <u>体育における自由活動</u> 、運動休憩、特別な上級レベル対応処置、学校生活の一部としての運動とスポーツ

(Müller & Kössler, 1999)

注) 四角囲み（筆者による）は、直接、体育の授業に関わる実践。

「運動導入学校」が「運動する喜び」「運動空間」「運動生活」「運動に親しむ」「運動する学校文化」などを強調するのは当然にしても、体育授業そのものに関する実践は、四角で囲んで示したように、少ない。もちろんあるにはあるが、体力トレーニング的ではなく、運動感覚を重視する指導や、多様な運動を体験させることが主眼とされているようである。むしろすべての授業で、身体を動かして学ぶ方法が志向されている。運動による身体と精神の解放効果を期待した実践も大切にされている。その他は、学校生活の中に多く運動を取り入れるための場づくりとその整備がほとんどである。地域スポーツとの連携を謳った実践が、表 1 から読み取りにくいのが意外であるが、それは広い意味で学校生活の一部と解釈されているのだろう。そうでないと、図 1 の「学外周辺との協同」が意味をなさないからである。

ドイツの「運動導入学校」は、上記のコンセプト・基本的内容が 90 年代に定型化され、現在に至っていると推察される。

4. 体育 (Sport 科) の授業に直接関わらない実践

4.1. 運動を伴う学習 (Bewegtes Lernen)

図 1 の「運動を伴う学習の諸形態」に該当する実践が、これに該当する。表 1 の「基本的内容」でいうと、「授業原理としての運動」「全感覚を用いた学習」「全身的学習」「運動を伴う学習」「授業のテーマに関係する運動」「運動を伴う（全身的）学習」「教科を超えて広がる学習原理としての運動」などが、含まれる。授業のねらい・内容・教材に相応して、手や足、心臓を動かし、身体の知覚と運動感覚を働かせる学習方法を伴う授業のことである。Hildebrandt-Stramann (2007) が編集した『運動導入学校』には、次のよう

な授業例が示されている。

音楽： 皮膚や髪など耳以外の感覚で音楽を鑑賞する。ダンス、リトミックのような運動を伴う内容・方法の積極的採用（Hildebrandt-Stramann, 2007, pp.142-161）。

数学： 大きな碁盤状のマス目計算の用紙、グラフ用紙などを床に置いたり、壁にかけて、その上に計算結果、座標などの解答を動きまわって示す（同前, pp.195-210）。

ドイツ語： 日常用語の習得や乗り物利用に必要な駅頭でのやり取りについて、その作業の体験をしたり、地域に出るなどして、学ぶ（同前, pp.211-224）。

事実教授（Sachunterricht）： 生活に必要な知識を、身体を動かして体験的に学ぶ。買い物や医者へのかかり方、労働の現場、スポーツ施設や劇場の利用、乗り物の利用などいろいろあり。2コマ連続の授業時間帯を工夫するなどして実施する（同前, pp.225-234）。

その他、歩行で身体表現する授業、物理で重量を感覚的に体感させる授業、生物で身体の機能を運動的に学ぶ授業、運動に関する宿題（家庭における運動の点検）なども例示されている。

「運動を伴う学習」（Bewegtes Lernen）は、動作や作業そのものを学び取る「動作学習」「作業学習」ではない。基本的には、体育以外の教科における「作業や動作をとおしての教育」というべき、身体を使って覚える学習方法や、感覚・知覚で感じ取らせる学習方法を用いる授業のことである。しかし、教科外の教育活動が含まれている場合も、身体を動かして運動量を増やす内容も含まれている場合もある。要するに、「運動導入学校」では、体育の運動学習を超越した「運動を伴う学習」の考え方と実践が存在しているのである。

4.2. 運動着座（Bewegtes Sitzen）

これについて、Thielら（2011, pp.65-67）は、大要、次のように説明している。

「運動を伴う学習」のような「運動導入学校」の一定の要素から独立した運動領域である。単調な机の座位から姿勢からを変えることにより、教室における緊張から解放させる着座である。休憩を兼ねた短時間の作業中断や休憩を兼ねた姿勢でもあり、図2に示したごとの各種着座姿勢がある。部屋の隅にしゃがみ込んだような座り、椅子から離れて仰向けや伏臥で本を読むなどの体勢もある。行儀が悪いと見られかねない読書姿勢もあるが、これも気分転換になる運動と考えられているのである。また、いろいろな姿勢を体験することにより、仕事に適した座位姿勢を認識させる効果もねらわれている。

図3に例示したような、背中を伸ばしたり、前屈したりする「活動的ダイナミック」な椅子体操もなされているし、「ボール椅子」に座って平衡感覚を養いながら机に向かう運動着座もある（Laging et al., 1998）。

教室におけるよい座位姿勢は、学習姿勢の基本であるが、過度の緊張姿勢は、かえって疲労を増幅させる一面もある。「運動導入学校」では、その矛盾を「運動着座」により軽減

し、姿勢教育にも役立てようとしているのである。

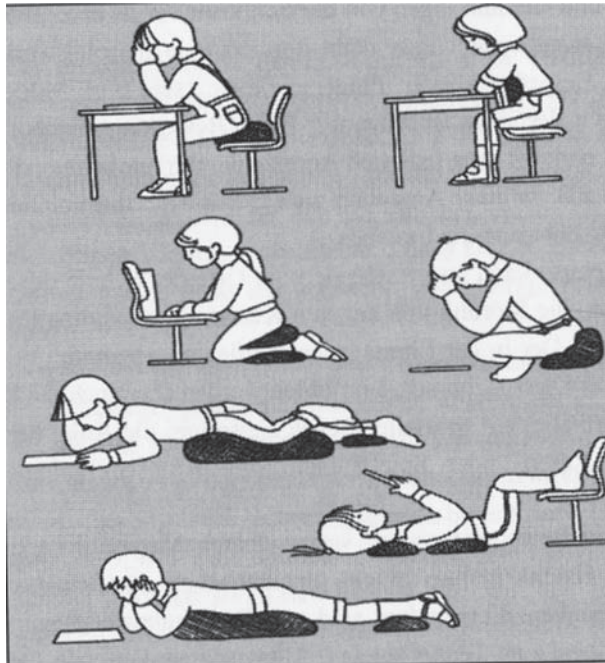


図 2 各種運動着座 (Müller, 1999)

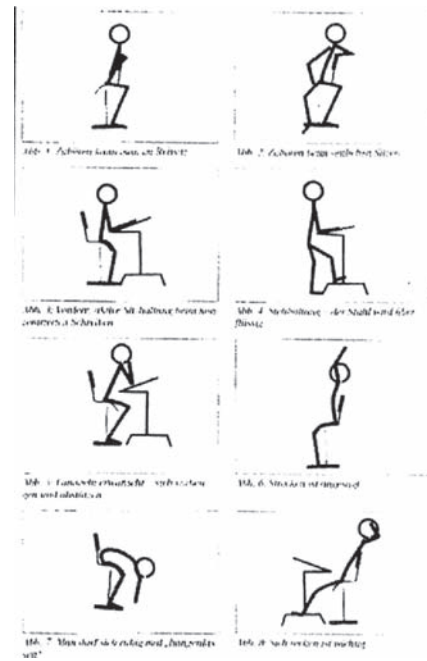


図 3 活動的ダイナミック着座 (Laging & Schillack, 1998)

4.3. 「運動休憩」「運動休憩時間づくり」と学校の運動環境づくり

この小見出しのことについては、すでに、図 1 と表 1 を用いて、その概略を説明した。ここではそのときに説明し切れなかった事柄に関して、少し補足する。

「運動休憩」は、Laging & Schillack (1998, p.33) がいう「授業中の運動」(Bewegung im Unterricht) と同じ意味で使われている。座業で疲れた筋肉の凝りと精神疲労を軽減し、集中力を回復する手段として、授業中に体操や軽運動をやることにより、積極的休息とすることである。日本では低学年で用いられることが多い教育方法に思えるが、ドイツの「運動導入学校」では日本の中・高学年でも取り入れられている。内容的には「運動着座」や教具を利用する運動もあり、教室外の実施も可能とされている。

「運動休憩時間づくり」は、午前中に 30 分程度の長い休み時間を取り、それを運動に供することである。運動用の特別な時間設定という形態は、日本の業間体育と似ている。しかしドイツの「運動導入学校」では、一般に全校一斉の指導形式は採用されておらず、子どもの自発的な運動時間となっている。また「運動休憩時間」は「2 度目の朝食」の時間ともなる。ドイツの学校は、一般に、7 時 30 分頃に始まり、午前の終わりが 13 時過ぎになる。登校前の朝食だけでは昼まで身体がもたないので、先生も子どもも午前の中間の

休み時間に軽食（持参した果物やクッキーの類）を摂る習慣がある。長い休み時間は、運動とともに、そのための「健康的な時間」でもあるのである。

図1にある「校舎づくり」「教室づくり」「校庭づくり」は、Laging & Schillack（同前、pp.32-34）によると、それらは「魅力的な運動グラウンド」（Anregendes Bewegungsgelände）、「校舎内の運動空間」（Bewegungsräume im Schulgebäude）、「運動ができる教室」（Bewegte Klassenräume）、「開放スポーツルーム」（Offene Sporträume）と括られている枠組みである。「開放スポーツルーム」とは、空き時間に自由に運動ができる部屋や小さな体育館である。

ドイツの学校は、日本の学校と似ており、一般に広い校庭を持っている。その校庭を、子どもの運動のためにもっと有効活用できるようにしようというのが「校庭づくり」の発想である（Coenen, 2007）。例えば、グラウンドの木、石、岩、土、流れる水などは、工夫次第で運動遊具になりうる。校庭の一角に固定遊具を集めたり、小山を築造して、体力づくりの周回コースをつくることもできる。ドイツでは、この施設は休憩時間や自由時間の使用が原則らしく、「休憩時間の庭」（Pausenhof）と呼ばれたりしている。

日本の学校では珍しいのが、「運動ができる教室」（Bewegte Klassenräume）である。これは、机・椅子などの校具の配置を工夫し、子どもが室内で安全に運動できるようにスペースを生み出した教室である。授業内容により、机や椅子を教室の片一方の側や隅に移動させたりもする。相対的に日本より広い教室に小人数なクラス編成というドイツの学校だからできる「教室づくり」といえよう。

「休憩時間の庭」は、日本の小学校における「登り棒、うんてい、太鼓橋、中空に張られた網、つり橋があり、古タイヤや杭・飛び石などが埋め込まれた校庭の一角」「体力づくりの小山やアスレチック」を連想させる。そういうドイツの「運動導入学校」の環境づくりは、日本の学校と似ている。しかし、体育館ではない校舎の片隅に運動用具をセットしたり、教室の中に運動できるスペースを設けたり、座学用の机・椅子、教具なども運動用の補助具に使用したり、授業時間中に床に寝転がって気晴らしをするなどは、日本の学校では大胆な発想となるだろう。

5. 全日制学校の設置進行と「運動導入学校」

「学校は、原則的に午前中で終わる」は、長くドイツで定着している。しかし現在、ドイツでは、この伝統的な半日制の学校を全日制に切り替える制度改革が進行中している。

ことの直接的な発端は、2001年のPISAショックに起因する連邦政府の全日制学校（Ganztagsschule）設置を推進する政策である^{注6}。そのことに対応して、在校時間の延長を、学力低下対策だけでなく、運動不足対策にも資するようにしようとする試みが増えて

いる。

例えば、Hildebrandt-Stramann (2012) は、子どもの「運動・遊び・スポーツ」を重視した表 2 と表 3 のような、全日制学校^{注7)}の一日を提示している。

表 2 授業学校としての全日制学校		表 3 運動志向の学習学校	
午前：		午前：	
教科 45 分刻み	7:45 教科授業	2 単位時間連続構造	7:30 自由時間で開始
	8:30 5 分間休憩		8:00 2 単位時間連続の教科授業
	8:35 教科授業		9:30 休憩
	9:20 20 分間休憩		10:00 2 単位時間連続の教科授業 (80 分)
	9:40 教科授業		11:20 休憩
	10:25 5 分間休憩		11:50 2 単位時間連続の教科授業 (80 分)
	10:30 教科授業	午後：	13:10 昼休み
	11:15 20 分間休憩	2 単位時間連続構造	14:00 宿題時間
	11:35 教科授業	各種選択制・必修制	14:30 子ども活動 (AG:
	12:20 5 分間休憩	で提供	Arbeitsgemeinschaft)
	12:25 教科授業		16:00
午後：	13:10 昼休み		(Hildebrandt-Stramann, 2012)
AG、多くの学校では	14:00 子ども活動 (AG:		
2 単位時間連続	Arbeitsgemeinschaft)		
	15:35		
	(Hildebrandt-Stramann, 2012)		

表 2 は、従来の半日制学校の午前に 20 分間休憩を 2 回設定し、午後に「子ども活動」(Arbeitsgemeinschaft) ができるようにした学校である。20 分休憩と午後の子どもの活動の時間帯とが運動時間の増加に寄与している「授業学校としての全日制学校」である。午後の活動には希望者のみが参加する開放型の全日制学校で実施されている。半日制学校を無理なく改変した学校スタイルといえよう。

表 3 は、午前 7 時 30 分からの「自由時間」に始まり、午前中は「2 単位時間連続の授業、30 分間休憩」を繰り返し、午後は宿題や「子ども活動」をする学校である。授業時間が長くなったことにより、授業中の軽運動や場所移動などがしやすくなっている。始業時の「自由時間」と 30 分休憩は、子どもの運動時間となる。もちろん、午後の子どもの活動の時間帯も運動のために利用できる。全日制になり時間配分に融通がきくようになった利点を生かせ、特に運動できるよう配慮した「運動志向の学習学校」である。これは、全員参加型、一部分全員参加型、開放型、いずれの全日制学校でも取り入れられている。

全日制学校の午後の「子ども活動」には、「学外周辺との協同」(図 1 参照) が欠かせない。そのパートナーであるが、全州規模の調査によると、基礎学校の 87.5%、中等教育諸学校の 51.7% が、スポーツクラブと協同しており、他の青少年教育組織、福祉施設、役所、企業、教会などと比較して断然多い (Arnoldt, 2010)。NRW 州でも同様に、スポーツクラブと協同する学校が最も多く、基礎学校 66.9%、中等教育諸学校 53.5% である (Börner et al., 2011)。

子どもが学校にいる時間が長くなる全日制学校と、「運動導入学校」との相性はよいと思われる。しかし、運動休憩時間の設定や「休憩時間の庭」の区画化は、かえって子どもの運動時間と場所を限定してしまいかねないとか、自主性を育てないとかの懸念がある上に、午後の活動まで、教師の責任範囲になる労働問題も指摘されている（Ungerer-Röhrich, 2010）。ドイツにおける全日制学校への切替えが、「運動導入学校」における子どもの体力を向上させる教育に貢献するのか、さらには本当に学校の発展につながるのか、その今後を注視したいと思う。

6. 結論

ドイツの「運動導入学校」は、子どもの体力づくりを重視して始まった学校である。体力低下対策が求められている状況は、日本もドイツも同じといえる。

しかし「運動導入学校」には、日本にはあまりない特徴も見られる。

まずそれが、校舎・教室・校庭などの学校環境の整備を含む、学校施設と子どもの学校生活のすべてを包含したとりくみであるということである。日本の学校の体力づくりで、校舎の改造や教室の配置替えまですることは、まずない。また、「校舎や教室を運動空間として活用する」「体育以外の授業でも、運動を取り入れた教育方法を採用する」「授業中に気分転換の軽運動をする」なども、静かな室内環境を保持する日本の学校には少ない発想である。

体育の授業における感覚・知覚を重視した指導方法には、「運動のしかた」を教えようとするコーディネーション能力養成の考え方があるように思われる。心身をリラックスさせる運動を授業中の気晴らしや休憩時間に取り入れる発想も、日本には少ない。体力づくりといえば、反復練習や動きまわることであり、運動量やパワーに偏りがちな日本の体育とは異なる発想が「運動導入学校」にはあるようである。そのせいか、「運動導入学校」では、日本の体力づくり実践校ほど体力テストは重視されていない。

「運動休憩時間」「休憩時間の庭」は、日本の学校の「業間体育」「体力づくり用アスレチック」と似ている。日本では、「業間体育」は子どもの自由な遊び時間を奪う、体力づくり遊具は飽きられるなど、の問題性が指摘されている。「運動導入学校」では、そういった問題はないのだろうか。

その他、教科外活動、行事、教師間の意思統一、家庭との関係、地域スポーツとの連携などに関しても、ドイツの「運動導入学校」と日本の体力づくりとの間には、似て非なる課題が多いと推察される。ドイツの「運動導入学校」の実態を知ることが、是々非々の立場から、日本の子どもの「身体とスポーツ」に関する自立能力を育てる教育を発展させる一助になればと願うものである。

最後に、ドイツにおける教育改革の動きと「運動導入学校」との関係について、述べておきたい。「全日制学校」への切り替えに際して、「運動導入学校」を意図する学校の増加は、体育の立場からは歓迎される。しかし、伝統的な地域スポーツが、そのままでは学校の午後に入り込めない問題も伝わっている。「運動導入学校」は、基本的には健康・体力に関する実践課題であるが、全日制学校化は教育全体における学校変革の課題である。体育教師と体育の専門家は、教育学的な見識を持って、全日制学校時代に対応しなければならないと思う。

注

注1) 当時も現在も、政府・官庁文書では、「体力づくり」。しかし、そのことを特定する場合を除き、本稿では、一般的な用語である「体力づくり」を使用する。

注2) 本論文では、主として、“*Bewegte Schule*”における、運動する場と時間を増やし、体力づくりを強化した特徴について論じる。その理由から、“*Bewegte Schule*”を「運動導入学校」と訳す。

注3) 近藤ら(2013)の論文について、少なくとも、以下の指摘はしなければならない。“*Bewegtes Sitzen*”は、「G ボールや半円等の椅子を用いることで、自然とバランスをとりながら座ることができるようにすること」のように限定的な意味ではない。本稿の本文「4.2.」でその内容・方法の例を示したごとく、いろいろな着座がある。また、“*Bewegte Pause*”は、「休み時間の運動の充実」ではなく、その言葉を借りて言い換えるならば、「運動の充実をした(長い)休み時間」となる。本文「3.」の図1の説明文で述べたごとくである。

“*Sachunterricht*”が「生活科」と捉えられているが、文部科学省や国立教育政策研究所の出版物では、「事実教授」である。生活科の訳語は不適切だろう。

“*Gebundene Ganztagschule*”は、「条件付き終日制学校」と訳されているが、“*gebunden*”は、下記の<注7>で説明されているように、強制、拘束、結合された状態を表す単語であり、「条件付き」ではない。また“*Ganztagschule*”に関しては、文部科学省の出版物では、「全日制学校」とされている。論文抄録では、それが“*all-day school*”と英訳されているが、ドイツ語論文の英文抄録では、“*Ganztagschule*”は、例外なく“*whole day school*”である。

正しい意味が伝われば、どのような訳語を使用しようと執筆者の自由であるが、近藤ら(2013)には、用語の理解が不十分のきらいがある。

注4) Illi が主導する「スイス学校体育連盟」(SVSS)の1983年大会がその発端になったとある。近藤ら(2013)も、このことについて説明している。

注5) この両者は紛らわしく、前者に後者の意味も含めた説明もある(Laging & Schillack, 1998, p.34)。本稿では、“*Bewegungspanse (n)*”を「運動休憩」、*“Bewegte Pause (n)”*を「運動休憩時間」と訳した。

注6) 「投資プログラム 将来の教育と保育」(IZBB)(2003年)による。なお、IZBBは、“*Investitionsprogramm Zukunft Bildung und Betreuung*”の略。

注7) 各州文部大臣会議(KMK)は、2003年に全日制学校について、「1日7時間以上在校を週3日以上」と定義し、下記の3形態を示している。

- ・全員参加型(voll gebundene Form)
- ・一部分全員参加型(teilweise gebundene Form) クラスや学年単位で全日活動に参加
- ・開放型(offene Form) 希望者のみ

文献

- Arnoldt, B. (2010) Kooperationspartner von Ganzttagsschulen: Berücksichtigung der Vielfalt. In: Böcker, P. & Laging, R. (Hrsg.) Bewegung, Spiel und Sport in der Ganzttagsschule (Bewegungs- und Sportpädagogik in Theorie und Forschung 9), Schneider Verlag Hohengehren: Baltmannweiler, pp.95-103.
- Börner, N., Eberitzsch, S., Grothues, R. & Wilk, A. (2011) Bildungsbericht Ganzttagsschule NRW 2011, Eigenverlag Forschungsverbund DJI/TU Dortmund: Dortmund, p.15.
- Coenen, G. (2007) Bewegungsraum Schulhof, In: Hildebrandt-Stramann, R. (Hrsg.) Bewegte Schule — Schule bewegt gestalten, Schneider Verlag Hohengehren: Baltmannweiler, pp.292-302.
- Der Kultusminister des Landes Nordrhein-Westfalen und AOK in Nordrhein-Westfalen (1988) Gesundheitserziehung in der Schule durch Sport — Handreichung für die Primarstufe, AOK: Bonn.
- Frommel, H. (2010) Die Ausdauerprüfung im Sportabitur des Landes Baden-Württemberg — Klappe, die Nächste, bitte...., Sportunterricht 59 (1) : 15-17.
- Hasler, A. R. & Granacher, U. (2010) Zusammenhang zwischen der Lauf- und Schwimmleistung im Cooper-Test — Eine Pilotstudie, Sportunterricht 59 (10) : 301-304.
- Hildebrandt-Stramann (2007) Bewegte Schule — Schule bewegt gestalten, Schneider Verlag Hohengehren: Baltmannweiler.
- Hildebrandt-Stramann, R. (2012) Rhythmisierung des Schultags in Ganzttagsschulen mit und durch Bewegung, Sportunterricht 61 (10) : 297-301.
- Horn, A. & Keyßner, J. (2009) Das projekt “Ausdauer in der Real- und Hauptschule” , Sportunterricht 58 (12) : 369-374.
- Illi, U. (1995) Bewegte Schule, Sportunterricht 44 (10) : 404-415.
- Illi, U. & Zahner, L. (1999) Bewegte Schule — Gesunde Schule. In: Pühse, U. & Illi, U. (Hrsg.) Bewegung und Sport im Lebensraum Schule, Karl Hofmann: Schorndorf, pp.23-50.
- 経済審議会 (1963) 経済発展における人的能力開発の課題と対策, 大蔵省印刷局: 東京, p.18.
- Ketelhut, K. & Bittmann, F. (2001) Bewegungsmangel im Kindalter — Sind Gesundheit und Fitness heutiger Kinder besorgniserregend?, Sportunterricht 50 (11) : 342-344.
- 岸本 肇 (1995) ドイツの「学校体育」における健康教育と体力づくり, 体育学研究 39 (5) : 323-330.
- 岸本 肇 (2006) 体育と教育, 児童発達研究 9 : 53-65.
- 近藤智靖・岡出美則・長谷川聖修・田附俊一・丸山真司 (2013) ドイツとスイスにおける「動きのある学校」の理念の拡がりとその事例について, 体育学研究 58 (1) : 343-360.
- König, S. (2007) Koordinationstraining im Schulsport: Eine empirische Untersuchung im Rahmen des Sportangebotes einer offenen Ganzttagsschule, Sportunterricht 56 (10) : 301-307.
- Laging, R. & Schillack, G. (1998) Schule als Bewegungsraum — Konzeption zur Einrichtung eines Modellversuches, Otto-von-Guericke-Universität-Magdeburg, Fakultät für Geistes-, Sozial- und Erziehungswissenschaften, Institut für Sportwissenschaft.
- Laging, R., Schillack, G. & Frank, I. (1998) Schule als Bewegungsraum — Praxismaterial zum Modellantrag, Otto-von-Guericke-Universität-Magdeburg, Fakultät für Geistes-, Sozial- und Erziehungswissenschaften, Institut für Sportwissenschaft, pp.17-18.

- 前川峯雄（1981）教科名の変更要求について－体育科からスポーツ科へ，学校体育 34（5）：8-9.
- 文部省（1966）青少年の健康と体力，帝国地方行政学会：東京.
- Schmelt, D., Hoffmann, D., & Naul, R. (2011) Bewegungsbildung und Gesundheitsförderung in der Ganztagschule. In: Naul, R. (Hrsg.) Bewegung, Spiel und Sport in der Ganztagschule, Meyer & Meyer Verlag: Aachen, pp.115-132.
- シーデントップ, D. (高橋健夫訳) (1981) 楽しい体育の創造－プレイ教育としての体育，大修館書店：東京, pp.228-232.
- 丹下保夫（1963）体育技術と運動文化，明治図書：東京， p.185.
- Thiel, A., Teubert, H. & Kleindienst-Cachay, C. (2007) Unter Druck durch PISA und Co? – Was erwarten Grundschullehrerinnen und -lehrer von der Bewegten Schule? In: Hildebrandt-Stramann, R. (Hrsg.) Bewegte Schule – Schule bewegt gestalten, Schneider Verlag Hohengehren: Baltmannsweiler, pp.316-327.
- Thiel, A., Teubert, H. & Kleindienst-Cachay, C. (2011) Die “Bewegte Schule” auf dem Weg in die Praxis, 4.Aufl., Schneider Verlag Hohengehren: Baltmannsweiler.
- Ungerer-Röhrich, U. (2010) Die Ganztagschule gestalten: Vom Einzelkämpfer zur Schulentwicklung, Sportunterricht 59 (4) : 97.
- Wydra, G. & Leweck, P. (2007) Zur kurzfristigen Trainierbarkeit der Fitness im Schulsport, Sportunterricht 56 (7) : 195-200.
- 全国体育授業研究会（2008）「楽しい体育」の豊かな可能性を拓く－授業実践への手引き－，明和出版：東京.